

が一羽スーッと鳴きもせず左から右に横切ってガスの中に消えて行った。今にして思えば、それが本当に鳥であったのか、物体が風に飛ばされたものの目の錯覚であったのか判らないが、兎に角、私はその時、それを鳥と

信じ堪らなく嬉しく、懐しく、親しく感じ、力の満ちてきたのを覚えたのである。この山頂に生物がいる。動くものがいる。語れば、手を指し伸ばせば応えてくれる動物がいる。安堵感より発する喜びが全身の緊張を解いてくれていることを意識したことを覚えていた。それから

は勇を鼓して白布峠に下ったのであるが、それ以来、あの鳥の名は何であったのか気に懸り、それがもとで、中西悟堂先生を会長とする日本野鳥の会に属し、県に支部を結成するメンバーに加えさせて戴けたのですが、当時自分なりに考えたことは、人の中には世俗を好まず、自然の中に全く没入したいとの願いを持つが、それは人間社会を背景に持った甘えの上でのことで、所詮一個の人間は単独では生活できず、山中で愛着を感じる鳥でさえ飢えれば殺しかねない、いや殺すことになるのであってこれは自然の循環（弱肉強食？）である。人として生ま

れた業（ごう）といえはそれまでであるが、それならば知恵のある生物として、人は自然の営みとして生産、消費、環元のリズムと天地万物のバランスを崩さない様に努力すべきである。

ハンターを野放し（勿論〇×式のテストはするが）に増やし、獲物よりも人の数が多いなどと言われながらも殺しをもって趣味となすことには賛成出来ない。自然の中では、他の生物は必要以上に殺されないことで、それを敢えてするところに自然破壊の端緒があるのです。

野外の鳥には、飼い鳥に見られない伸びやかさと、剝製には見られない色彩の鮮かさ、柔らかさがあり、動作にも面白さがあり、見あきることはありません。そして姿、形ばかりでなく、自由にさえずるときの誇らしげさは可愛いもので、日常の繁雑さを忘れさせてくれます。

鳥に親しむことに初めての人、身近かな鳥の観察より始めて、図鑑で研究して行くことです。そのためには、できれば餌台を作って近くの庭に置き、野鳥を寄せてみたら如何かと思えます。スズメ、ムクドリなどは、その好例で、ツバメ等と異なり植物質の餌を（繁殖期を除い